

クレーンオペレーター 松沢紀世

クレーンという重機がどれだけ活躍しているかは、工事現場を観察するとよくわかる。鉄骨などの重量物はもちろん、資機材の移動にも頻繁に使われるため、特に規模の大きな現場ではほぼ休みなく稼働している。万が一、吊り荷が落ちたりすれば大事故に直結するため、安全面での責任も大きい。そのクレーンを二十年以上にわたって動かしてきた女性オペレーターから、その仕事を聞いた。

きっかけは父のすすめ

クレーンのオペレーター・松沢紀世は、東京足立区の生まれ。高校を卒業後、機械好きが高じてバイクや自動車の免許を取り、配送業に就いていたが、土木関係の仕事をしていた父の「今日、現場に女性がクレーンに乗ってきて、カッコよかったよ。お前の性格に合ってるんじゃないか」との助言に後押しされて、転職を決めた。「建設関係の就職情報誌で探したら、たまたま近所で募集してる会社があって、そこに入りました。それが今の勤務先です。女性がいま

ないっていう話だったので、そこも魅力だったというか…珍しいことが好きだったんですね」

「男の世界」に入って…

一口にクレーンといっても、タワークレーンやクローラクレーンなどさまざまな種類があり、それぞれ専門のオペレーターがいる。松沢の担当は「二五ドラフタークレーン」と呼ばれる自走式タイプで、クレーンの操作席と車の運転席が一体になっている。比較的小回りの利く重機だが、それでも車体の全長は一メートルあり、操縦には大型免許を要する。これを女性が自在に操る姿は、あまり想像できない。

「以前は、初めて行く現場なんかだと、やっぱりあからさまに嫌な顔をする方がいたんですよ。こういう現場に女性がいること自体を嫌がる人が。事前に作業の打ち合わせをして、『これはできない』って言うのと『だから女は嫌なんだよ』みたいなことを言われて」

たとえそれが安全上の配慮からの意見でも、パワハラまがいの感情的な発言で拒絶された。



左/現場内にて、左から須藤所長、松沢、内馬場副所長。
中/型枠や足場の材料をまとめて吊り、移動させる。現場内では、人力で運べる物の方が少ない。
右/工事は昭和の名建築と言われる法政大学55・58年館の直近で行われており、操作にはよりいっそうの慎重さが求められる。

KEEP

守り、伝えること

『吊れないものは吊れない』と
はつきり言える意志の強さは必要



CHANGE

応じ、変えること

『女性だからできない』とは言われたくない、
その思いでずっとやってきた

現場のプロフェッショナル KEEP & CHANGE

「もう聞き流すしかなかったんですけど(笑)、女性に対して『下手くそ』とか『トロい』っていうイメージが抜けないんでしょうね。そういう時は説明してもどうにもならないんで、なぜできないかを実際にやってみせるんです」

いざという時、味方がいない

クレーンのオペレーター職には、「基本的に一人で現場に向かなければならない」という、男社会であること以上にシビアな側面がある。

左/見えているハンドルは車の運転のためのもので、クレーンを動かすレバーは座席の横にある。「操縦席から見ていると、人それぞれしてほしいことがわかってくる。人間ウォッチングみたいで面白いですよ」
右/吊り荷にワイヤーをかける薦職とは、無線や手合図で会話する。「動かすスピードは職人さんによって変えます。粗すぎず、遅すぎず、メリハリが大事なんです」

「うちの男性社員でも言ってますけど、いきなり一人で行くって言うのは…。職人さんたちは仲間が何人もいるけど、こっちは何かあった時に誰も自分の側に立ってくれないということ。言わなきゃいけないことをはっきり言うと、なかなか受け入れられなかったりするんですよ」

その日の作業量によって必要なクレーンの台数を判断し、設置箇所を決める際も、アウトリガーを張り出す部分の地盤の強度確認が欠かせない。クレーンが無事設置されて初めて現場が動くともいえるが、その根幹の決断を自分だけの裁量で下す神経は、やはり並大抵ではない。

「最近、大きな現場で他のオペさんの仕事を見る機会があったんですけど、拡声器とかで『ダメだ、これじゃ吊れない』ってはっきり言ってるんです。安全でないことに対して『できないよ』ってちゃんと伝える強い意志は必要ですよ。ね。何かあったらケガするのは職人さんだし。もちろん、それをわかってもらうためには日ごろのコミュニケーションも大事ですが」

女性の視点から、業界の改善を

現在松沢がクレーンオペを務めているのは、千代田区の法政大学キャンパス建替工事の現場。大成建設(株)・須藤茂作業所長は、松沢が所属する東邦重機開発(株)とのつきあいが長く、その操

作の細やかさには高い信頼を置いている。

「男性の場合、操作に慣れれば慣れるほど多少ラフになって、手早くやってやろうという傾向があると思うんです。でも彼女の場合はそれが無い。現場から上がってくる声も『慎重で、不安なところが全くない』とか『他の男性オペよりうまい』とか、とにかく評判がいいです」
昨秋、日建連が建設業界で働く女性の愛称を『けんせつ小町』と定めた。まさにその言葉どおりの活躍ぶりだが、業界に対しては改善すべき点を女性の視点から厳しく指摘した。

「職人さん全員じゃないですけど、やっぱり身だしなみとか歩き方とか、一般的なマナーが足りてない人が多いと思うんですよ。イメージを変えていくには、一人ひとりもって周りの目を気にするべきなんじゃないかな、と」



まつざわ・きよ◎1969(昭和44)年、東京都生まれ。高校卒業後、配送業を経てクレーンオペレーターに転職。2004(平成16)年に東邦重機開発株式会社に入社。25tラフタークレーンの運転士として、土木・建築を問わずさまざまな現場に赴く。